

ナガエツルノゲイトウについて

田中俊雄*

Alternanthera philoxeroides (Mart.) Griseb., a new naturalized plant
from Amagasaki City
Toshio Tanaka

筆者が、兵庫県尼崎市西昆陽2丁目の水田の隅やあぜに、表題の植物が生育しているのを最初に見たのは、1986年10月のことである。都会のなかの水田という、何の変哲もない場所で見られた植物なのだが、対生する葉の先端近く、葉腋から、長い柄を突き出して、頭状の白い花を咲かせるこの植物の名前を、図鑑で調べても一致するものがないので、しばらくはそのままにしておいた。しかしよく調べてみると、同属（ツルノゲイトウ属）のツルノゲイトウに似てはいるが、花序のつき方や雄ずいの本数など、明らかに異なっている。そこで京都大学の村田源先生に同定を依頼したところ、ヒユ科植物のナガエツルノゲイトウ *Alternanthera philoxeroides* (Mart.) Griseb. であり、日本では、最初の採集品であるかもしれない、とのことであった。

『FLORA OF TAIWAN』によると、原産地は中央アメリカであり、台湾では、島の北部の下水溝、池、どぶなどに沿って見られる、との記述がある。また、『中国高等植物図鑑』には、北京などでも生育している趣旨の記述があるので、原産地からはかなり北の方まで広がり、日本にも入り込んできたものと思われるが、今までのところ、一箇所ですら観察していない。

観察をしてきた中でわかった特徴は、次の通りである。

水田の周囲を土堤状に盛土してある場所から、イネが育成しているすぐ近くにまで、地を覆うように広がっている多年生草本。叢生する茎の多くは地表に伏し、下部の節々からは赤みを帯びた根が出る。茎も赤みを帯び、節間には2条の毛の列がある。葉は倒披針形で、大きなもので長さ7cm幅2cm。表裏とも毛を散生、葉縁には小さな鋸歯がある。先端は鋭形で基部はだんだん細くなり、無柄もしくは短い葉柄がある。対生する葉の葉柄が茎とつながる葉間部には、白毛が目立つ。茎の先端もしくは少し下の葉腋から2~3cm位の花柄を突き出し、その先に球状の頭状花序をつける。花被は5枚、長さ6mm~7mm、かさかさした膜状で無毛。中央脈はやや太く盛り上がるが、同じ白色なので目立たない。内面下部にうす紫色を帯びた小さな突起がある。白色膜質の包葉は、花被

よりはるかに短い。雄ずいは5個で、先端が針状に裂けた5個の仮雄ずいと交互に並ぶ。雄ずいと仮雄ずいの白色の花糸は、幅広の膜質で、下部はつながり、雌ずいを取り巻く。葯は黄色。雌ずいは1個。球状の柱頭はうす緑。子房はレンズ形でつやのある緑。1年のうち2回、6月頃と10月頃に開花するのを見ている。花後は新芽がさらに先に伸びていき、冬の間も、つやのある濃い緑の葉が地表を覆っている。今までの観察では、子房のなかの胚珠はほとんど成長していかず、結実は見えていないので、果実の形態は不明である。

なお、生育していた場所は、すぐ近くを自動車やバスが頻繁に通るような、都市の中にわずかに残された水田のへりであり、周囲にはよくゴミが捨てられていたり、歩く人にも踏まれたりするところである。また、草が生い茂れば、しばしば刈り取りもされている。田や畑でごく普通に見られるハコベ、ホトケノザ、ミノゴメなどとともに生育しているのであるが、これらのものが枯れてしまう時期でも、地面にへばりついているナガエツルノゲイトウは、多い少ないにかかわらず、一年中いつでも見られる。

ナガエツルノゲイトウと同じく、水田の近辺で見られるツルノゲイトウと比較すると、次のような点が異なっている。

	ナガエツルノゲイトウ <i>Alternanthera philoxeroides</i> (Mart.) Griseb.	ツルノゲイトウ <i>Alternanthera sessilis</i> (L.) DC.
	多年草	1年草
花序のつき方	花柄がある	無柄
雄ずい	5個 間によく目立つ仮雄ずいがある	3個
果実	結実を見ていない	偏平で先が少しくぼむ。中には赤褐色で光沢のある種子が1個入っている

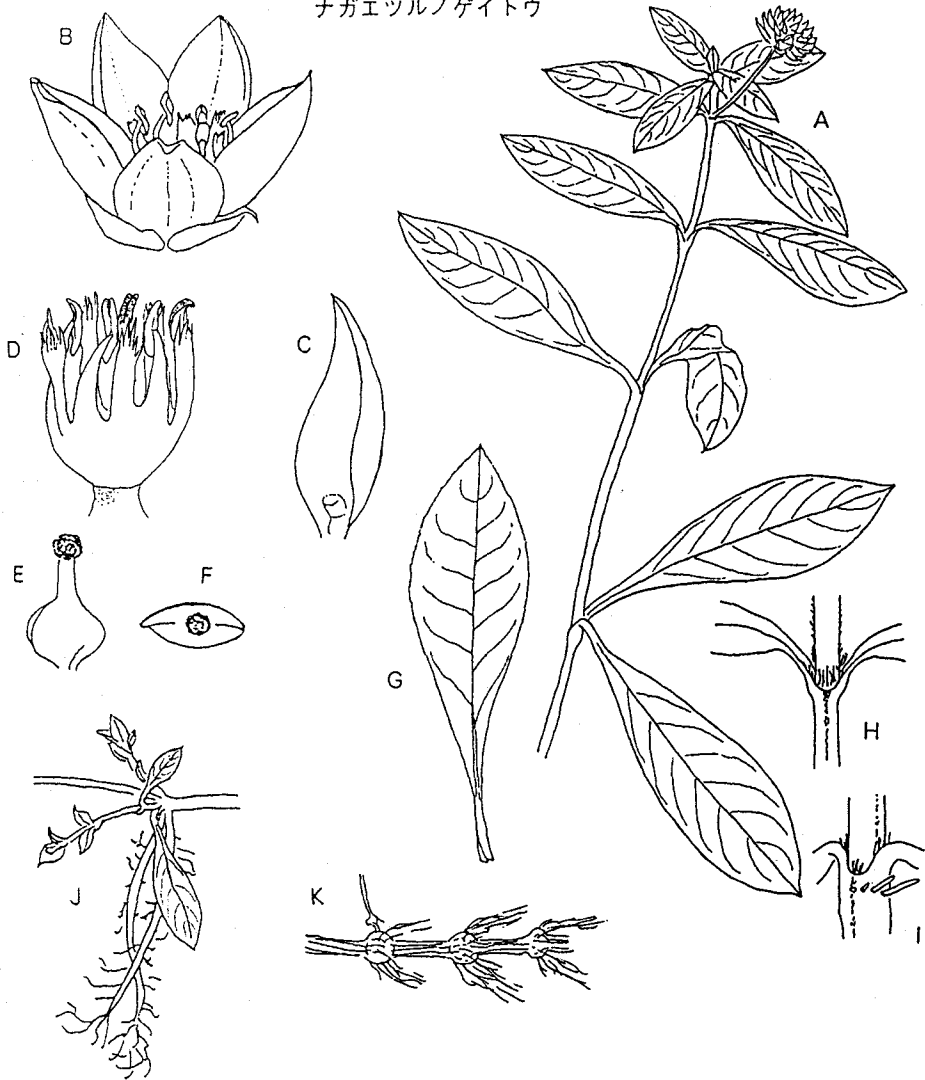
この植物の同定に当たり、村田源先生には大変お世話になりました。深く感謝いたします。

参考文献

- 台湾植物誌編集委員会 1976 FLORA OF TAIWAN
Angiospermae II EPOCH 現代関係出版社
中国科学院植物研究所 1980 中国高等植物図鑑
第一冊 科学出版社

* 兵庫県立武庫荘高等学校

ナガエツルノゲイトウ



ナガエツルノゲイトウ *Alternanthera philoxeroides* (Mart.) Griseb. の各部の説明

- A. (×0.7) 茎の上部。花序は1個(まれに2個)。花序の柄の長さは2~3cm。
- B. (×5.0) 花。頭花の中の花の数は15~20個ぐらい。
- C. (×5.0) 花被。白色の膜質で下部は少し赤らむ。5枚。中央脈があるが同じ白色なので目立たない。両面無毛。内面下部に、うす紫色を帯びた小さな突起が見られる。花被の外側には、図Bで示したような白色膜質の包葉がある。
- D. (×8.0) 雄ずいと仮雄ずい。5本が交互に並ぶ。花糸は白色、葯は黄色。仮雄ずいは先が針状に裂ける。
- E. (×9.0) 雌ずい。横から見たもの。柱頭はうす緑、子房はつやのある緑。
- F. (×9.0) 雌ずい。上から見たもの。
- G. (×0.8) 対生する葉の1枚。表裏ともに少しつやがある。表裏とも毛を散生。葉縁にはごく小さな鋸歯がある。
- H. (×1.5) 葉柄のつけね。葉間部には白毛が多い。茎は赤みを帯びるものもあり、節間には、2条の毛の列がある。
- I. (×2.5) 葉柄のつけね。中部から下部にかけての茎には、根が出ているものが見られる。
- J. (×0.5) 節部なら地中に伸びた根。根は赤みを帯びる。
- K. (×0.6) 地下茎の一部。